

私は午後一番の予定があつて12時台に食事が必要な時、よく移動途中でファストフード店を利用する。ある日、例によって2階のカウンター席からぼんやり窓の外を眺めていて「この街は死んでいる」とふと思った。同時に「この前の街は生き生きと動いていたなあ」という印象も思い出した。そのとき、不意に私の胸にシャルル・アズナヴァールの「おお、我が人生(Ô! TOI LA VIE)」の一節が去来した。『私はある朝、自分の青春が見えなくなることを心配している』『!』『そうか、この街には青春がないんだ!だから生命力を感じなかったのか!』と気づいて「青春」の意味を考えてみた。日本ではこの言葉は若い世代に限定されがちだが、私は「青春とは夢と希望と悩みを持つ未来へ向かう前進力」だと思ふ。つまり年齢に関係なく前進し続けている以上「青春」なのだ。そのとき「蜷川幸雄さんは未だに青春だなあ」とポッと心に浮かんで、また連想が続いた。私の脳裏には二人の「青春」が焼き付いている。その一人は「高齢のため日本ツアーはこれで最後」と言ったシャルル・アズナヴァール。そのとき彼は83歳だったが青春の真っ只中だった。もう一人はヴァイオリニストのステファン・グラッペリ。彼は88歳の来日を最後に翌年亡くなったが、その演奏時の神聖な空気は今も覚えている。彼は死ぬまで青春だった。それらの印象は時を経ても実に爽やかで、揺れ動く若き風を含んだ色褪せない円熟した息吹を心のアルバムに残している。

そこでまた逆の印象に思いを馳せる。以前ある音楽家のステージを見た時「この人、もう終わっている」と瞬時に思ったこと。50歳を超えたステージで疲れが見えた歌手のこと。「終わっている」というのは、今まで培ったものだけの披露と既成物のアレンジに留まり新しい発想がないこと。「疲れが見える」ステージは聴いている客としても「お疲れ様」状態になること。いずれも「青春」は感じられないどころか、聴いた後で老けたような気がする。そう思うと近年、何となく同窓会的なコンサートが多いようにも思う。歌手や演奏者との近い関係は普段は嬉しいが、できればステージという空間には「神聖さ」と「音楽という天上に近い世界」の空気を感じてみたいものだ。するとまた先のふたりを思い出す。彼らの現実の容姿は目に映っていたけれど、心に映っていたのは声や演奏に含まれていた青春だったと。業界では「最近このジャンルは人気がない」とか「お客が減った」というけれど、内容が退屈というより、もしかして「青春」がないせいでは?などと思ってしまう。客に気に入られた過去のプログラム遺跡を発掘するより、人間の方の生命感を掘り返す方が先ではないかと。

それにしても絵の場合、体力も使うがそれより精神力の方が大きい。「この力強い絵、90歳の人が描いたんですかあ!?!」ということもあるくらい、手が震えたり視力が衰えたりしなければ息が長い。演奏者の場合も同様だろう。身体自体が楽器で肉体疲労が否めない歌手は少々分が悪いが、それでも精神力の方が大きいことは同様である。「円熟する」ことは青春が終わることではない。また円熟が安定で、青春が不安定という定義もない。「乗っているか〜い!」というバリバリ表面的音声・パフォーマンス過多とも違う。青春は内面の生命の躍動感である。一足飛びの爆発的飛躍ではない地道で確実な発展途上の生命力である。そこには存分に生きたいという思いが含まれている。こうなりたいという夢と希望。そうなるための悩みと努力。それを手に入れた時の喜び。その次の発想と実現の楽しみ。それが青春ではないだろうか? (2013.2.17)